

岡山大学

埋蔵文化財調査研究センター報

第28号

2002年9月 発行

岡山大学

埋蔵文化財調査研究センター

〒700-8530

岡山市津島中3丁目1番1号

TEL・FAX (086)251-7290

ホームページ <http://www.okayama-u.ac.jp/user/arc/archome.html>



野外考古学教室での調理実験の様子(1989年)

いただきます

ナベとお椀の考古学

「食べる」ということは、人間の営みに欠かせない活動です。人類史上、この「食べる」という行為に多大な影響をもたらしたのは「土器」の発明でした。人類は土器を使うことにより、堅果類などの植物質食料や魚介類などの食材を、「煮る」、「蒸す」、といった調理法でアク抜きなどの加工を施し、食べることが可能となりました。

また、土器には貯蔵用、煮沸用、食器用など食に関するさまざまな用途があり、非常に食生活にかかわりの深い道具といえます。したがって炊事道具や食器の変化は、食生活の移り変わりを反映していると考えられるのです。そこで考古学では、地中に遺された土器の観察を通して、その土器を使っていた人々の暮らしの様子を探っているのです。

さらに、人々が実際に食した食材の残滓（食べかす、ごみ）が発掘によって発見されており、道具以外の面からも食生活の実態に迫ることができるようになってきました。

このような発掘調査や土器の観察などの成果をもとに、岡山大学構内遺跡の出土資料からわかる人々の「食」という営みの変化を探っていきたいと思います。 (野崎貴博)

煮炊きの道具

土器の誕生 ◆縄文時代◆

食料を煮炊きして食べることができるようになりました。口が大きくあいた土器、食べ物を煮炊きするほかに木の実のアク抜きなどにも使いました。口が大きくて、アクを煮こぼすのに便利かも。

日本での土器の出現は縄文時代草創期（約1万2000年前）にさかのぼります。土器を使用することにより、調理法の幅が広がり、多くの食材を加工することが可能になりました。



(手前：浅鉢、奥：深鉢、津島岡大遺跡)

お米も煮ました ◆弥生時代◆

稲作の導入で、お米が主食の一部となりました。吹きこぼれのある土器、何を煮たのでしょうか。

弥生時代にはコメを炊いて食べたり、粥にして食べていたと考えられます。また、モチゴメをチマキのように加工していたことも知られています。



吹きこぼれ

(手前：甕、鹿田遺跡、奥：甕、津島岡大遺跡) (煤の付着した甕、鹿田遺跡)

カマド出現 コシキきたる ◆古墳時代◆



(底が筒抜けのコシキ、鹿田遺跡)

古墳時代になると、カマドを作りつける家が出てきました。5世紀には、朝鮮半島からコシキ（蒸し器）が入ってきました。米を蒸して食べることもできるようになりました。

それまでの地床炉（地面を掘りくぼめた炉）に代わりカマドが炊飯の場となりました。またコシキの出現によって蒸すことが可能となり、調理法の幅も広がりました。炊飯方法の変化や、土器の形の移り変わりから食生活の変化をみてとることができます。

多彩なナベ ◆鎌倉・室町時代◆

鎌倉から室町時代にかけて、いろいろな形のナベが登場しました。

鍋は火処の形に応じてその形が違います。カマドに架ける甕や、脚を持つ鍋、囲炉裏にかける内耳を持つ鍋など、時期や使用される場面に応じて使い分けられました。日常的には鉄釜の使用が主流であり、土師器は祭祀に用いられたとも考えられています。



(カマドにたき木をくべる様子)



(左：三足付鍋、右：内耳鍋、鹿田遺跡)

うつわの歴史

みんなでどうぞ ◆縄文時代◆

調理された食べ物は、浅鉢という小ぶりの土器に盛ったと考えられています。それをみんなで取り分けて食べたのでしょうか。

縄文土器には深鉢、浅鉢という器種が多くみられます。表面に吹きこぼれや煤が付着する深鉢は主に煮炊きや貯蔵に、浅鉢は主に食べ物を盛るために使われていたと考えられます。



(浅鉢:左は無文、右は外面の文様、津島岡大遺跡)

私の器? あなたの器? ◆弥生時代◆

縄文時代までは、個人用の器はなかったと考えられています。弥生時代になり小型の高杯や鉢がその役目を果たした、と考えられています。みなさんは、どう思いますか?

『魏志』倭人伝には、倭人の食生活について、「^{へんとう}籩豆手食」と伝えてあります。「籩豆」とは中国で祭祀・宴会に用いた供物を盛る器で、竹や木製の器です。この「籩豆」を高杯とする見方もあります。



(高杯の大小、鹿田遺跡)

規格化と多様化 ◆古墳時代末から奈良・平安時代◆

同じ形の土器でも、大・中・小というセットで使われることがありました。都と同様の使い方をしていたようです。

また、黒色土器、金属や漆塗りの器が登場しました。それまでの須恵器の青色や土師器の赤色に加え、黒や金属の器が加わりました。

食器は奈良時代になるといくつもの形に分かれたり、

同じ形でも大きさの異なるものが現れてきます。都では宮廷における食事・宴会の場で身分を表示する必要があったからです。また、大陸からもたらされた青磁や白磁などの輸入品、金属器や緑釉を模倣した土器が作られるようになります。これらも身分に応じて使い分けされたようです。



(手前:規格化された土器、奥:多様な土器、津島岡大遺跡、鹿田遺跡)

大量使用・大量消費 ◆鎌倉・室町時代◆

発掘を行っているとき、土壌、井戸や溝から大量の土師器の食器が出土することがあります。何のために、そんなにたくさん使われ、そして捨てられたのでしょうか……。



(廃棄された土器の出土状況、鹿田遺跡)



(大量に廃棄された皿や椀、鹿田遺跡)

人々の生活を支えたおびただしい量の焼き物は、生活のさまざまな場面で使い分けていたようです。祭祀に使われる土器も大量に生産されました。祭祀に用いられた大量の土器はそのまま土壌、井戸や溝等に廃棄されたようです。

(横田美香・野崎)

◆ ◆ 最近の発掘調査から ◆ ◆

津島岡大遺跡第27次調査（50周年記念会館建設に伴う発掘調査）

50周年記念会館建設に先だって、今年の2月1日～6月24日まで発掘調査を行いました。場所は事務局の北側で、昨年、調査を行った第26次調査（本部棟）地点に隣接しています。



（縄文時代の炉を調査している様子）

明治時代の造成による盛り土とその下にある近世の水田層を除去すると、まず中世（鎌倉～室町時代）の水田、畑の畝、溝、畦畔などがみつけられました。畦畔はちょうど坪境にあたる場所に位置するもので、幅が1 m以上あり、上

面には石を敷いてあるところもある立派なものでした。ほぼ同じ場所に何度もつくり直されており、土地を区画する重要な畦畔だったと思われます。

中世層より下の層では、古墳時代の溝、弥生時代の水田などがみつけられました。またさらに下の縄文時代後期の層では、直径約3 m、深さが約40 cmある大きなくぼみの中から大量の焼土や炭がみつけられました。焼土は炉の壁などが壊れた残骸であると思われますが、最も厚く堆積しているところでは30 cm以上もあり、通常の炉ではなく特異な構造をもつものであったと思われます。ただし今回の調査では残存状態が良好でなく、詳細な構造をつかむまでにはあたりませんでした。今後の調査に期待したいと思います。

（高田浩司）

津島岡大遺跡第28次調査・鹿田遺跡第13次調査速報！

津島岡大遺跡第28次調査は4月から、鹿田遺跡第13次調査は5月から発掘調査を開始しました。津島岡大遺跡第28次調査では、縄文時代の河道、弥生時代の水田、溝など、鹿田遺跡第13次調査では、古墳時代前期、中世の遺構群の調査を行っています。鹿田遺跡では古墳時代初頭の土器だまりや溝等の遺構を確認し、9月には現地説明会を行いました。

第6回 岡山大学キャンパス発掘成果展

「使ってみよう！石の道具」

開催のお知らせ

埋蔵文化財調査研究センターでは、2002年10月21日（月）～11月1日（金）の期間で、第6回岡山大学キャンパス発掘成果展「使ってみよう！石の道具」を開催します。期間中は土・日も開催します。時間は10時～16時です。ぜひ見学におこし下さい。

■ 編集後記

今回のセンター報は、第6回展示会の内容にあわせ、展示解説形式で作っています。お手元にセンター報を持って展示をご覧いただけるようにしておりますので、展示とセンター報を合わせてご覧下さい。（野崎）